

現地を訪問して想うこと

山岡 二三男 (1991・文)

訪問する前は、3年半も経って「何を今さら」と思われるのではないかという心配もありましたが、バスの中で、宮城県校友会の津田副会長の「まずは東北を見てほしい、やはり目の当たりにしないと分からないことがたくさんある。それが一番の支援です。」という挨拶を聞き、やっぱり訪問して良かったと感じました。

最初に訪れたのは漫画と海産物で有名な石巻市でした。私は事前に、石巻市のシンボルになっている「日本製紙工場」の復活について書かれた本を読んでいましたので、この工場の煙突からでる白い煙を見たときには、とても感動しました。訪問したのは石巻水産という缶詰工場で、社長でOBの木村さんの弟さんが話を聞かせてくださいました。津波の後は「もうどうにもならない、会社は辞めるしかない」と思ったといいます。しかし缶詰を拾いに来てくれるボランティアの人たちに励まされ、ここまで何とか続けることができたそうです。そして、震災の時中学生だった子供が、高校生になり石巻を出ていくのではなく、石巻に残ってくれるようになったと言っていました。それはなん何なのだろうかとは私は考えました。私は、困難に直面してお互いが助け合うことで、石巻の人たちが今まで以上に強い「絆」を持ったからではないかと考えました。木村さんがもう一度やろうと思ったのも、高校生が石巻に残りたいと思ったのもこの「絆」によるものではないでしょうか。お土産にいただいたサンマの缶詰は、今まで食べて中で一番おいしかったです。校友会の皆様もぜひ食べてみてください。

次に訪れたのは、女川町です。人口約1万人の町ですが、そのうち1割近くの人が津波の犠牲になった町で、比率でいうと一番の被害が大きかった町だそうです。被害が大きくなった理由の一つに、女川の人は津波には慣れっこになっていて、津波が来てもどうせまたひざ下くらいまでだろうと見くびっていたことがあったそうです。ところが今回の津波はビルの3階まで、なんと15mの津波でした。津波がこないで安心してシャッターを下ろしにいたり、家族に会いに行ったりした人が犠牲になりました。観光協会の安倍さんは、「津波の時はバラバラで逃げられる人からでいいから逃げてほしい、自分の命を大切にしてほしい」と涙ながらに訴えていました。しかし姉川の人は前も見ています。「津波は町を壊したかもしれないけど、姉川の人たちの夢は壊せなかった」という児童作品の言葉が女川町民の今の気持ちを表しています。「女川は流されたのではない、新しい女川に生まれ変わるのだ。人々は負けずに待ち続ける、新しい女川に住む喜びを感じるために。女川駅は来年3月に完成し、鉄道もつながるそうです。どの町よりも早く新しい町を地域と一体となって踏み出している町でした。近いうちにまた訪れてみたいと思います。

松島の宿舎についてから、77年卒業の佐々木圭亮・靖子夫妻からの体験談を聞きました。佐々木さんは笹かまの「ささ圭」を経営しておられ、その本社工場が津波で流されました。「希望を捨てなかつたら何とかなる」と思ってここまで頑張ってきたそうです。当初は、手焼きで笹かまを作ることからはじめた苦労話を聞きました。今では新しい自社工場を作り機械で笹かまを作っていますが、その店頭では、復興時と同じように、手で笹かまを焼いています。ささ圭さんがここまでやってこられたのも、夫婦の「絆」、社員の「絆」によるものだったそうです。

2日目はまず伊達家の菩提寺である瑞巖寺を訪れ、その後日本三景の一つに数えられる松島の遊覧船に乗り塩釜港にまで行きました。塩釜は全国一人口に対する寿司店が多いところだそうです。この寿司が本当に新鮮で、山陰の魚も上手いけど、塩釜のお魚も最高でした。2日目のメインは観光でしたが、宮城の素晴らしいところも体験でき、海産物を中心にお土産もいっぱい買いました。

最後に1泊2日の応援ツアーでしたが、参加させていただいて本当にありがとうございました。二日間を通じていろいろな人の「絆」に出会いました。「被災地を見てほしい、そして東北のいいところも訪ねてほしい、そして最後に東北を忘れないでほしい」言う言葉が、印象に残っています。このような機会を与えてくれた校友会のみなさん本当にありがとうございました。